

ワークショップ『もようのたね』の実践報告

—木と糸を用いた造形活動における体験的学びと支援—

A Practical Report on the Workshop “Moyou no Tane”:

Experiential Learning and Support in
a Creative Activity Using Wood and Yarn

木崎 由実子
Yumiko KIZAKI

1. はじめに

本論は、青山学院大学教育学部山下暁子ゼミナールの活動として実施された全3回のワークショップのうち、第3回目にあたる「もようのたね—木と糸で描くカラフルアート—」の実践を報告し、その教育的意義を考察するものである。

造形教育の分野では、知識や技術の習得にとどまらず、素材との関わりや身体的な体験を通して創造性を育む学びが重視されている。本活動では、木と毛糸を扱った造形活動を題材に、体験を重視した学びのあり方を検討するとともに、活動に関わった学生スタッフの支援的な関わりに注目し、教育的な意義を考察する。

2. ねらい

学校教育における学習指導要領に基づいた授業とは異なり、ワークショップ形式の活動では、参加者が評価や成果にとらわれず、遊びに近い感覚でのびのびと創造活動を楽しむことができる。作品の完成そのものを目的とするのではなく、新しい素材や行為に出会い、自らの関心に基づいて試行錯誤する過程に価値がある。こうした自主的な取り組みの中で、参加者が体験を通して創造する喜びや楽しさを味わうことが、重要な意義である。

高橋（2011）は、造形の分野におけるワークショップの意義を「知識技術の修得よりも、造形の楽しさを誰もが享受できること」にあると述べている。¹⁾ また、市原（2022）は、「参加者を主体とし、造形活動をするなかでコミュニケーションや、協同を通して楽しさや面白さといった感情を互いに共有できる活動」と述べており、ワークショップが楽しさや共感を通じた学びの場であるこ

とを指摘している。²⁾このような理念に基づき、教室ではなく青山学院内の開かれた空間で、異なるアプローチによって創造活動の機会を設けることは、参加者にとって新しい学びの可能性を広げる意義深い試みである。

さらに、この取り組みを支援した学生にとっても、教育的な学びの機会となるといえる。学生スタッフには、教員として指導的に関わるのではなく、参加者が創造したいことを実現できるよう臨機応変に支援し、共に楽しむことを求めた。高橋(2009)は、教員がファシリテーション能力を備える重要性を指摘し、そのためには教室の中で指導する立場だけでなく、学校外の場において支援的な立場で他者の学びを促進する経験を積む必要があると述べている。³⁾本活動で学生は、必要に応じて最小限の支援を行うことで、指導者ではなく支援者として関わる経験をした。参加者の主体的な創造性を尊重しながら学びの場を構成する指導の在り方を、実践的に理解する契機となった。

3. 題材設計

本活動の題材は、木のスライスに数か所の穴を開け、そこに毛糸を通して模様をつくるというものである。木を用いた造形活動は感覚を刺激し、豊かな感性を育む素材として、幼児教育や造形教育の分野で注目されている。⁴⁾彫刻を専門とする筆者は、木の教育的価値を生かしながら、木を使った創作の楽しさを伝えることを目指した。そこで、子供でも安全に扱える手回しドリルを用いた木工を企画した。穴を開ける体験では、ハンドルを回す際の抵抗感や刃が進む音、木の香り、手触りの心地よさなど、感覚を通して木の個性を感じ取ることができる。手回しドリルは、木という自然素材がもつ感覚的体験を最大限に引き出すことが可能であると考えた。

また、幼児教育の造形活動の場で広く用いられている毛糸は、柔らかく扱いやすい素材であり、指先の発達を促しながら、自由な発想で表現できる点に特徴がある。穴に通す、引っ張る、巻きつけるといった単純な動作は、幼児でも無理なく行えるものであり、集中と達成感を伴う体験的な学びとなる。さらに、毛糸のふわふわとした柔らかな手触りと、木のざらざらとした質感の対比は、触覚的な楽しみを生み出すと考えられる。

この題材の特徴は、毛糸を通すだけで作品が成立するという単純さにある。どのように糸を通しても、色の組み合わせや構成の違いによって、それぞれの個性がおのずと表れる。活動の中心は、技術の巧拙ではなく、自分が「心地よい」「美しい」と感じる模様を探ることであり、自らの感性に基づいて形を生み出す行為そのものに価値を見いだす体験である。そこでは、他者からの評価に左右されることなく、自らの感性を拠りどころに思考し判断する姿勢が育まれる。

4. 実践の概要

4.1 ワークショップの概要

題材名：「もようのたね—木と糸で描くカラフルアート—」

実施日：2025年7月10日（木）

時間：14時～16時

場所：青山学院大学 青山キャンパス中庭横

対象者：青山学院関係者

参加者数：約45名（初等部児童、保護者）

スタッフ：大学生8名、教員2名



図1 配布したチラシ

本題材名の「もようのたね」とは、果物や野菜を切断したときの断面に種子が並んで模様のように見える形から着想を得ている。外側からは想像できない個性的な断面を持つものも多く、自然の造形が生み出す多様な美しさを象徴している。また「たね」という言葉には、植物の種子が生命の源であるように、創造の芽が生まれる起点という意味があり、参加者一人ひとりの中にある創造の可能性の種を芽吹かせるという願いが込められている。（図1）

4.2 準備と安全指導

素材には、ストラップに適した直径約5 cmの木のスライスを採用した。木の持つ模様や質感・香り・温もりといった木そのものの個性を活かすために、角材やベニヤ板などの加工された木材ではなく、樹皮や節を残した枝を使用した。試作の結果、木はドリルによる圧力が一点に集中すると亀裂が生じて割れやすいことが判明したため、穴の開けやすさと割れにくさの両立を考慮し、厚みを約3 mmに加工した。

ドリルの径は5 mmとし、穴を開ける際には、割れを防ぐため、穴の数を制限し、穴同士の間隔を十分にあけるように指示した。また、摩擦によりドリル先端が熱を持つため、作業中は触れないよう注意喚起を行った。工具は、手回しドリル、卓上手回しボール盤、電動ドリルの3種類を準備した。基本は手回しドリルを使用してもらい、力の弱い低学年児童には卓上手回しボール盤を提供した。電動ドリルは、作業による疲労が見られた参加者への支援として、スタッフが補助的に使用したが、希望する児童には安全に配慮した上で体験させる場面も設けた。

屋外での作業を可能にするため、木のスライスを固定できる専用のクランプ（図2）も製作し、作業の安定性を確保した。専用クランプは、木がくぼみに収まるように設計されており、ドリルの刃が抜ける際の感覚を身体で実感できるよう、下部に貫通穴を設けた。こうした構造によって、作業中の安全を確保しながらも、木を貫く感覚的な体験を損なわない工夫を施している。

毛糸は中細のものを使用した。試作では、毛糸が太く穴がすぐに埋まってしまい、想定していた

構成を十分に表現できないとの意見が出た。この経験から、参加者が自由に糸を通す回数や構成を調整できるようにするため、5mmの穴に複数回通せる細めの毛糸を採用した。色は全11色を用意し、そのうち4種類は混色タイプとした。混色タイプの毛糸は、巻きつけるだけでグラデーションが生まれるため、色の構成や組み合わせに不慣れでも、偶然の色の重なりを楽しみながら表現を広げることができるよう工夫している。

作品は最後にストラップとして仕上げ、そのままカバンなどにつけて持ち帰れるようにした。体験後も日常生活の中で触れたり眺めたりすることで、創作体験を思い出し、愛着を感じられる作品となることを目指した。

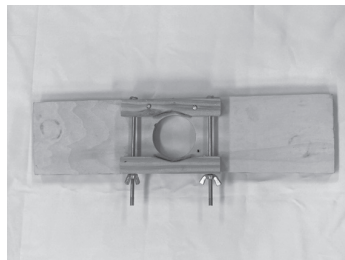


図2 専用クランプ

4.3 活動手順

当日はドリル作業を補助するスタッフと毛糸作業を補助するスタッフに分かれて支援した。手順は以下の通りである。

- ①好きな木を選び、穴を開けたい場所に印をつける。
- ②専用クランプに木を固定し、ドリルで穴を開ける。
- ③穴を全て開け、クランプから外す。
- ④一つの穴にストラップ紐を通す。
- ⑤好きな毛糸を選んで、片腕ぐらいの長さに切る。
- ⑥毛糸を穴に通し、抜けないようにテープで固定する。
- ⑦通し終えた毛糸は、端どうしを堅結びする。
- ⑧様々な色でくりかえし、模様をつくる。

4.4 会場の構成

青山キャンパスの中庭横に位置する通りで実施した。特に仕切りを設けずに開放的な空間構成とし、通りがかった児童や親子が気軽に立ち寄り、飛び込みで参加できるよう配慮した。会場内は、ドリルで穴をあける作業エリアと、毛糸で模様をつくる作業エリアを分けて配置した(図3, 4)。毛糸作業エリアは、もともと設置されていたベンチをテーブル代わりに使用し、毛糸や用具を置く場所とした。ドリル作業エリアでは、図工室から持ち出した箱椅子に専用クランプを取り付け、複数並べることで、屋外でも好きな場所で作業ができるようにした。

このような活動が見える屋外での開放的な構成は、他者の関心を引き、学内における新たな交流のきっかけを生む効果があった。人通りの多い場所であるため、活動の様子が自然と目に留まりやすく、通りすがりの大学生や職員が足を止めて見学したり、友人同士で誘い合って参加したりする姿も見られた。活動を閉じられた空間に限定せず、学内の誰もが関われる形で実施した点に、今回のワークショップの特色がある。

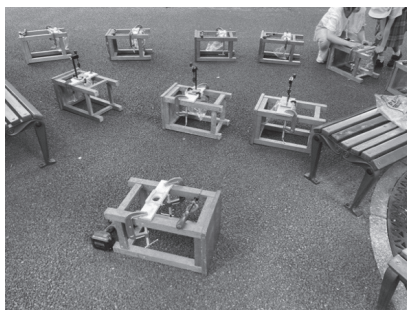


図3 ドリル作業台



図4 毛糸受け渡し場所

5. 実践の結果と考察

5.1 参加者の様子

親子、兄弟、友人同士など、さまざまな関係性での参加が見られた。親が子供に使い方を教えながら取り組む姿や、兄が妹の作業を手伝う姿が観察され、関係性に応じた会話や助け合いが自然と生まれていた。

ドリルによる穴あけ作業では、穴から螺旋状に排出する木屑や、摩擦により木が焦げる匂いに驚きの声が上がった。参加者の表情や発話からは、視覚・聴覚・嗅覚・触覚を使ってその変化に気づき、素材の特性を身体的に感じ取っている様子がうかがえた。特に、ドリルが貫通する瞬間の「抜ける感覚」は多くの参加者にとって印象的であったようであり、その瞬間に歓声を上げる姿も見受けられた。低学年の児童にとって、ドリルの操作はやや難易度が高く、身体を大きく使う作業に苦勞していたが、その分、周囲との協力や会話が促され、互いに助け合いながら作業を進めており、ドリル作業を終えた後には、達成感に満ちた表情を浮かべていた(図5)。

毛糸の作業においては、毛糸を抜いたり通したりする動作を繰り返しながら、模様を作り出そうと試行錯誤する様子が見られた(図6)。色の組み合わせや配置に工夫を凝らすなど、視覚的なバランスへの意識が確認できた。また、友人同士で相談しながらお揃いの作品をつくる参加者もあり、周囲の作品を参考に取り入れて工夫する様子から、他者との関わりを通して表現を深める学びがうかがえた。一方で、複数の低学年の児童は模様づくりそのものよりも、「穴に毛糸を通す」「巻きつける」といった触覚的操作に強い関心を示し、その行為自体を楽しむ様子が観察できた。興味深いことに、中には大量の毛糸を使って穴の位置に関係なく木を覆うように巻きつける児童もいた。これは毛糸を通し切って、すべての穴が埋まってしまった後も、さらに巻きつけたいという欲求から生じた表現であると考えられる。このように、参加者はそれぞれ異なる要素に関心を示し、自分なりの視点や方法で楽しみ方を見い出していた。

完成後は、さっそくカバンに作品をつける児童や、手に持って触れながら眺める児童など、さまざまな姿が見られた。ある児童は「首にかけたい」と希望し、ストラップを付けるかわりに毛糸で首紐をつけて仕上げた。さらに、ストラップの紐を毛糸に変えたり、ストラップ部分を加工したり

するなど、工夫をする児童もいた(図7)。それぞれが作品をどのように身につけたいかを自ら考え、スタッフに提案し、自分のアイデアを言葉にして伝えるその過程には、活動への主体的な関わりが感じられた。また、作品を身につけて互いに見せ合い、大切に扱う様子からは、自分のつくったものに対する愛着や誇りを感じているように見えた。この活動が参加者にとって達成感や満足感を伴う充実した創作体験であったことがうかがえた。

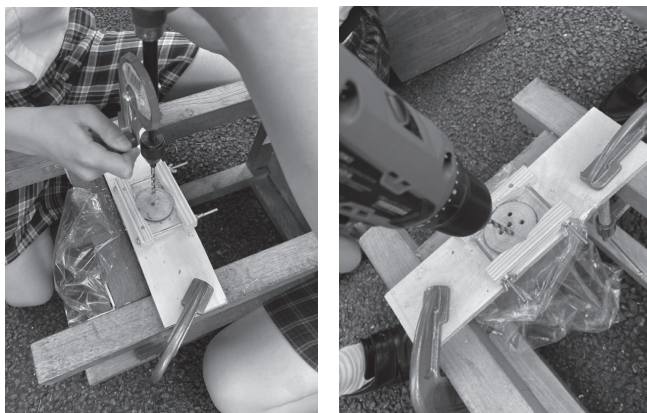


図5 ドリル作業の様子



図6 毛糸作業の様子



図7 身につけている様子

5.2 完成作品

完成作品の一部を抜粋し、特徴ごとにまとめた。穴の配置には一定の規則性が見られるものの、糸の色や通し方の違いによって多様な表現が生まれていた。巻きつけた模様が特徴的な作品(図8)では、毛糸の色の重なりとそれによって生じるグラデーションが印象的であり、触覚だけでなく、視覚的に楽しんでいる様子がうかがえた。巻き付け方は様々で、バリエーションの多さには驚かされた。不規則的な模様が特徴の作品(図9)では成り行きに任せて穴に糸を通してしている痕跡が見られ、偶然性を活かした表現となっている。幾何学的な模様の作品(図10)では、穴の位置に合わせてシンメトリーな模様をつくるなど、意図的な構成が見られた。



図8 巻きつけた模様



図9 不規則的な模様

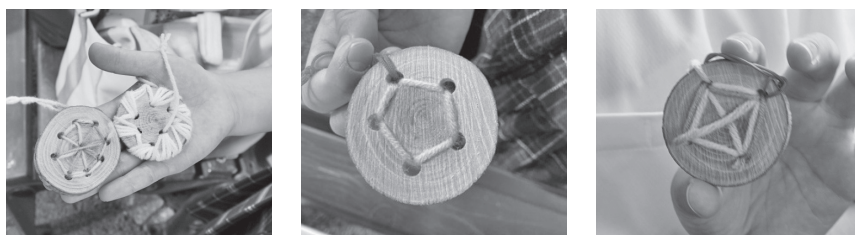


図10 幾何学的な模様

どのようなイメージからその模様をつくったのか尋ねると、規則性のある模様を作った作品でも「なんとなく」と回答する児童が多く、模様の構成は計画的ではなく、作業中に試行錯誤しながら、即興的に進められていることが明らかとなった。それぞれの作品には、作者自身の感性に基づいた工夫が見られ、個性豊かな表現となっている。

5.3 スタッフの様子

事前の打ち合わせでは、スタッフ自身が実際に作業を体験し、参加者の視点に立って活動内容を検討した。作業を通して危険箇所や支援が必要な場面を確認しながら、どのようにすれば活動をより魅力的にできるかについて意見を出し合った。

当日は、児童との対話を通して制作を支援する姿が多く見られた(図11)。一方で、道具の扱いや作業の進行において予期せぬ問題が生じることもあり、その都度、即興的かつ柔軟な対応が求められた。作業手順がやや複雑であったため、児童それぞれの理解度や得意・不得意に応じて、言葉のかけ方や支援の程度を調整しながら、試行錯誤する様子が見られた。活動の中では、模様をつくるという目的から離れ、独自の方法で取り組む児童も見られたが、スタッフはその手を止めることなく、児童の発想を尊重して見守る姿勢を貫いていた。

スタッフとして参加した大学生のうち5名は教育学部の1年生であり、教育実習前の段階で児童と直接関わり、学びを支える経験を積む貴重な機会となった。児童が作業に熱中している様子や、困難に直面しても諦めずに取り組もうとする意欲に感銘を受け、造形教育に改めて関心を示していた。この経験は、将来教員を志す学生にとって、学習者の主体的な創造性を尊重しながら指導する姿勢を実践的に理解する契機となったといえる。



図 11 学生スタッフの様子

6. 課題

本活動を通して、いくつかの運営上の課題が明らかとなった。まず、使用する毛糸の色選びに関して、改善の余地がある。今回は全体の統一感を考慮して同一トーンのパステルカラーを中心に用意したが、男児を中心に「赤や黄色、黒などの原色を使いたい」という要望が寄せられた。年齢層や性別に応じた色の好みを事前に調査して、より多様な色を準備することが必要だと考えられる。

また、予想以上の参加者が短時間に集中したことで、設備や人員が一時的に不足する状況が見られた。特にドリルの回転方向を誤る操作などがあり、安全確保と効率的な指導の両立が求められた。今後は、スタッフの配置を強化し、作業導入時の説明を丁寧に行うなど、工夫が必要である。しか

しながら、活動中の小さな失敗や試行錯誤も、造形活動における学習過程として重要である。安全と表現の自由の両立を目指し、適切な距離感での支援を模索していきたい。

今後は、参加者が自らの発想や感性を存分に発揮でき、安心して活動に取り組める環境づくりの充実を図る。

7. まとめ

本活動は、木と毛糸を題材に、体験を重視した学びを目指して企画した。ドリルを回す手応えや木の香り、毛糸の柔らかな感触など、視覚・聴覚・嗅覚・触覚から得た刺激は、それぞれにとって新鮮な発見となっていたように思う。完成後、作品を見せ合って喜びを共有する姿には、創作を介したコミュニケーションの広がり示していた。何よりも、参加者たちが終始楽しみながら活動に取り組み、自分がよいと思える作品を完成させたことは、本活動の最も重要な成果である。学生スタッフにとっても、児童との関わり方や安全面への配慮、声かけの工夫などを実際に体験しながら学ぶ、貴重な機会となった。

今後は、今回とは異なる形で木の特性を生かした造形活動や、青山学院内の豊かな自然環境を活用した企画を検討したい。また、こうした取り組みを通じて、青山学院内における授業外の第二の創造活動の場として、継続的に発展させていきたい。

引用・参考文献

- 1) 高橋陽一（2011）「造形ワークショップの担い手とは」高橋陽一（編）『造形ワークショップの広がり』第1章、武蔵野美術大学出版局、13-33.
- 2) 市原奨太郎（2022）「美術教育におけるワークショップの可能性—体験と対話を重視した実践研究—」『美術教育学研究』大学美術教育学会54、25-32.
- 3) 高橋陽一（2009）『美術と福祉のワークショップ』武蔵野美術大学出版局
- 4) 梶間奈保（2025）「子どもの発達と玩具の関係について：木製玩具に関する基礎的研究（1）視覚・聴覚・触覚・嗅覚に着目して」『人間と文化』島根県立大学8、87-96.